

リセット⑧

きさらぎ
如月ゆすら・作
いちい
市井あさ・絵



アルファポリスきずな文庫

ロウィーナ

エアデルト王妃。
カインを王家から
追い出そうとたくらむ。

オリバレス

ロウィーナに協力する子爵。
何やら怪しい動きをして
いたが、その正体は……!?

リュシオン

クレセニア王国の
王子。魔力が
強大すぎて
周りから恐れ
られている。

カイン

公爵家に身を
寄せていた少年。
実はエアデルト
王国の第二王子。

フレイル

精霊使いの少年。
他の人にはその力を
秘密にしている。

ジーン

ルーナの長兄。
利発なしっかり者で、
リュシオンを助ける。

ルーナ

女子高生・千幸が
転生した姿。前世の
記憶と強大な魔力を
持ちつつ0歳から
人生やり直し中。

CHARACTER

登場人物

あらすじ

ふ うれつづ まえむ い じよし こうせい ち ゆき
不連続しながらも、前向きに生きてきた女子高生・千幸。

がん ば ぼうび
頑張ったご褒美として、

かみさま い せ かい てんせい
神様が異世界に転生させてくれることになりました！



てんせいさき けん まほう せ かい
転生先は剣と魔法の世界・サントロイメ。

となり くに
お隣の国エアデルトの

おうたいし たす
王太子を助けるため、

アンブロシア さが い
「神木の実」を探しに行くことになったんだ。

みち たいへん
でも、その道のりはすごく大変で……!?



もくじ

だい
よんしやう
第四章

あらし
嵐のあとの光芒

159

だい
さんしやう
第三章

いつわ
偽りの衣を捨てし時

93

だい
にしやう
第二章

かく
隠された糸をたどり

55

だい
いっしやう
第一章

れい ほう
霊峰の神獣と水の精霊

6

CONTENTS

第一章 霊峰の神獣と水の精霊

ロズワルド山に入つて三日目。

〈身体強化〉の魔法を施しているとはいえ、だんだんと険しくなる山道はルーナにとつて決して楽なものではなかった。さらに山の入口付近とはすっかり変わってしまった周囲の風景が、彼女の気を減入らせる。

美しい緑は姿を消し、代わりに現れたのはひび割れた大地に、黒く変色して倒れた木々立っている木もほとんどが黒ずんで、葉はすべて落ちていてという有様だ。

「なんだが不気味な景色になってきたね」

辺りを見渡してつぶやいたルーナに、先頭を歩いてきたナイジェルも足を止めて目を眇めた。

「どうやら霧が出てきたようですね」

ナイジェルが指し示す方向を見れば、うつすらとした白い霧が周辺を覆い尽くすように

近づいてきていた。

「参つたな……これでは視界が悪すぎる」

急斜面を登って行くわけではないが、あちこちに倒木や地面から盛り上がった木の根などがあり、その上視界も悪いとなれば進むのに支障が出る。

「野営をするにしても、ここではない……」

カインは周囲を見渡してつぶやく。わずかな草場さえもない場所では、ラズゴアの餌がないので野営には向かないのだ。その間に霧はルーナたちの辺りまで迫ってきていた。

「とりあえず頂上を目指してきましたが、上に登るほど神域という名にはふさわしくない光景になってきましたね」

ため息を零すナイジェルにうなずき、ルーナたちはひとまず落ち着ける場所を探そうと、一寸先すら見えなくなりつつある濃い霧の中を手探りで歩き始めた。

カインと手を繋いだルーナは、足下に気をつけながら慎重に足を運ぶ。反対側のルーナの手を握っていた風姫は、転びかけた彼女を目にして忌々しそうに霧を睨んだ。

『こんな霧、妾の風で吹き飛ばしてしまうか？』
一瞬頼みたい誘惑に駆られたものの、ルーナは慌てて首を振る。



「そんなことしたらナイジェルさんに不思議に思われちゃうよ」

『人とは難儀なもののお……』

自分なりにルーナの事情は理解しているのか、しみじみとした物言いをする風姫に、彼女は思わず口元を緩めた。そんな時、シリウスが鋭くルーナの名を呼んだ。

「ルーナ！」

「え？」

緊迫した声音に、彼女は身を強張らせて足下のシリウスへ目をやる。ドライアイスを溶かしたような白い霧の中、身動きもせずただ一点を凝視しているシリウスに、ルーナは不安で胸が締め付けられるのを感じた。

「しいちゃん、どうしたの？」

ルーナが恐る恐る声をかけると、前方を睨んだままのシリウスに代わり、振り返って彼女を見上げたレグルスが答える。

「結界の気配がする」

「それって……」

「うむ、探していたものかもしれないな」

驚愕するルーナに、レグルスは淡々と返す。彼女は逸る気持ちを抑え、握っていたカインの手を強く引いた。

「ルーナ？」

背伸びをしたルーナの話の間こうと屈んだカインに、彼女は小声で訴える。

「見つけたかもしれないの」

「見つけた？ どういうことですか？」

曖昧な言葉に首を傾げるカインへ、彼女はナイジェルに聞こえないよう説明を続けた。

「しいちゃんどれぐちやんが、結界の気配がするっていうの」

「本当ですか!？」

思わず大きな声を出したカインに、前を歩くナイジェルが足を止めて訝しげな視線を寄

こそす。

「どうかなさったのですか？」

「ああ、悪い。どうやら探しものが見つかったかもしれないんだ」

驚かせようとわざともつて回つた言い方をしたカインに、ナイジェルが困惑の表情を浮かべると、彼は一拍置いて重々しく告げた。

「神域だ」

(ちよつとカインつてば！ まだ本当にそうかわかんないのに……)

言い切る彼に内心焦りつつ、ルーナは繋いでいた手を解いてその場にしゃがみこんだ。

「しいちゃん、結界つてわたしたちが探している神域で間違いないのかな？」

「多分な。こんな場所にそういくつも結界はないだろう」

慎重にシリウスが答えると、横で聞いていたレグルスも口を挟む。

「少なくとも人の作る結界ではない。おそらくルーナの探しているもので間違いないと思うぞ」

「人が作るものじゃないつて、じゃあ本当にそうかも！」

ルーナは興奮して声をあげ、二匹に向かつて手を合わせた。

「二人ともお願い！ 結界までわたしたちを連れて行つて」

ルーナの『お願い』をシリウスたちが拒否できるはずもない。彼らは「了解した」ともつたいぶつてうなずくが、シリウスのしつぽは大きく左右に振れ、レグルスのしつぽはピンと上に向いている。それはまさしく獣たちが喜んでる証拠だった。

『ルーナ、この霧だ。奴らからはぐれぬよう、妾がちゃんと案内するからな』

すかさずアピールする風姫に苦笑しつつ、ルーナは立ち上がつてカインに小さく告げる。「カイン、案内してもらうからついてきて」

「わかりました。ナイジェル、行くぞ」

ナイジェルに声をかけたカインにルーナが手を差し出すと、彼はしっかりとそれを掴む。彼女はそんな彼と目を合わせると、大きく一度うなずいて歩き出した。

十

濃霧の中、軽やかな足取りでシリウスとレグルスは先頭を切つて歩いて行く。少し離れただけで彼らの姿は霧にかき消されてしまうが、風姫のおかげで見失わずについていくこ

とができた。

しばらく進んだところで、突然二匹の足が止まる。ルーナは俯きがちのまま足下に注意を払って歩いていたが、彼らの様子に気づき、勢い込んで前方を見た。そこには一段と濃い霧によって白くドーム状になった場所があった。

「あれは……」

明らかに異質な様相に、ルーナたちはただ目を奪われる。そんな彼らを余所にシリウスとレグルスは一歩前へ踏み出した。

「あつ、待つて！」

慌てて後に続くルーナを、さらにカインたちが追う。そうしてだんだん深くなる霧の中を恐る恐る進んで行くと、しばらくして唐突にそれは現れた。

一本の大きな木。

太い幹から四方に枝を伸ばし、鮮やかな緑の葉が風に遊ぶ。辺りは霧のせいで白くぼやけているにもかかわらず、その木を中心としたエリアだけは、まるで小さな囲いで隔てられたように、明るい日差しが差し込む別世界となっている。その幻想的な光景は、雪こそ降っていないものの、巨大なスノードームを思わせた。

「あれが神木……？」

ルーナの口から出た言葉は疑問の形をとつてはいたが、確信のこもつたものだった。周辺は枯れ木ばかりでありながら、その木だけは生命力に満ち溢れている。これが神木でないのなら、一体なんだというのか。

三人は引き寄せられるようにゆつくりと神木に近づいていく。

そして霧の世界との境界線を眼前にしたところで、「止まれ」という、心を震わせるような不思議な声に歩みを止めた。

三人が声のした方向へ顔を向けると、岩壁の突き出た柵の上に、一頭の雄々しくも美しい白鹿が立っていた。

それがただの鹿でないのは一目瞭然。

普通の鹿の二倍はあろうという巨軀は、純白の被毛に覆われ、大きく左右に突き出した角は光を浴びて輝く金。そして角と同じ金色の叡知をたたえた瞳で、ルーナたちをじつと見据えていた。

「汝ら、何ゆえ神域を侵す」

威厳に満ちた声音に怯むことなく、カインは一歩前に進み出る。

「神域にあるという、神木の実を分けてもらいたくてここまで来ました。貴方は神木の守護者なのででしょうか？」

「さよう。我はペリアヴェスタ。この神域を、神の授けし聖なる木を守る者」

カインの質問に、白い鹿——神獣はそう名乗る。そして考え込むようにしてつぶやいた。

「汝らが欲するは、神木の実か……」

「お願いです。どうか神木の実をお譲り下さい」

大きく声をあげて頼むルーナに、ペリアヴェスタはじつと見透かすような目を向ける。

数秒とも、数十秒とも思える沈黙の後、神獣は言った。

「——よかろう。汝らの願い、叶えてもよい」

彼の言葉に、ルーナたちは顔を見合わせてホッと息をつく。しかしペリアヴェスタは、

一呼吸置いて「ただし、条件がある」と付け加えた。

「条件、ですか？」

何を言われるのかと不安そうなルーナの瞳に、ペリアヴェスタは憂いに満ちた金の瞳を合わせた。

「ロスワルドは見ての通り荒れ果てている。それというのも十年ほど前から瘴気が漂うよ



うになり、聖なる泉が涸れたからだ。それ以来大地はやせ衰え、神木も力尽きて枯れていった。今や神木もこの木が生き残っているだけだ」

「瘴気？ でも登つてくる時はそんな感じじゃなかったのに……」

ルーナはペリアヴェスタの言葉に首を傾げ、不思議そうにつぶやく。

瘴気は明確にわかるものではないが、魔物の死骸などから出たそれを人が長時間浴びると、気分が悪くなるなどがある。しかし、ルーナにはそんな症状は現れていないし、万が一彼女が無自覚であったとしても、シリウスとレグルスがすぐに気づいているはずだ。

ルーナの疑問に神獣は辺りの枯れた木々を見渡し、辛そうに告げた。

「瘴気の源は我が土の中に封じているゆえ、空中に広がることはない。しかしそれは地中に染み渡り、今も大地を穢し続けている。人の子らよ、汝らにそれを浄化することができるか？ そして聖なる泉を蘇らせることができるか？」

ペリアヴェスタの問いかけに、ルーナたちは困惑した顔を見合わせる。

神木の実を手にしたのなら、彼の頼みを断るわけにはいかない。だが神官ではない彼らに瘴気の浄化などできるはずもないのだ。一度山を下り、神官を伴って来るにしても、またこの場所に辿り着ける保証はない。

(どうすればいいんだろう……)

ルーナたちが途方に暮れていると、彼女の袖口が不意に引つ張られた。何事かと視線を向けると、そこには満面の笑みを浮かべている風姫がいた。

「浄化ならば、そこにおるしいれぐにやらせれば良いではないか」

「あ……！」

風姫の言葉にルーナは思わず声をあげた。彼らはエアデルトまでの道中、ニコラスの持っていた小瓶の中の瘴気をいとも簡単に浄化してしまったことを思い出したのだ。

(そうだ、しいちやんとれぐちやんなら……！)

ルーナが期待を込めた眼差しで二匹を見ると、彼らは凜として言い放つ。

「我らならば造作ないことだな」

「うむ、任せろ」

シリウスとレグルスの頼もしい宣言に顔を輝かせたルーナは、ペリアヴェスタに返事をしようとして、ハタと止まる。

(あ、でも。カインはともかく、ナイジェルさんにしいちやんたちのことをバラしちゃうのはまずいよね……)

どうしようと考え込む彼女に、助け船は意外なところから現れた。

「私の条件を呑むのならば、約束の証として汝らのうち一人を結界に残して行くがよい」それはルーナにとつて渡りに船の提案だった。彼女はカインにだけ聞こえるようにシリウスたちのことを告げると、彼は一度うなずいてから神獣に向き直った。「その条件を呑みます。瘴気に穢れたこの地を浄化し、聖なる泉を復活させる。そのあかつきには神木の実を」

ペリアヴェスタはカインの言葉に金の瞳を一度閉じると、「契約は結ばれた」と宣言する。それを聞いたカインは、続いてナイジェルに声をかけた。

「ナイジェル、彼の望みは僕たちが叶える。おまえはここで待っていてくれ」

「カイン様!? 何をおっしゃるのです!」

カインの命令とはいえ、自分を残してか弱いルーナを連れていくのが納得できず、ナイジェルは声を荒らげる。しかしカインは怯むことなく告げた。

「これは剣でどうにかなる問題ではない」

「しかし、何があるかも……」

なおも不満げなナイジェルに、カインは強い眼差しを向ける。

「僕たちは何がなんでも神木の実を持ち帰らなければならぬ。危険だというならば僕だつて剣を振ることが出来る。だが、瘴気を浄化させたり、泉を蘇らせるという時に剣が役に立つと思うか?」

戦闘能力や肉体的な頑健さが必要ならば、ナイジェルとて引き下がることはなかっただろう。しかし今回の場合は違う。カインの言う通り、自分の出る幕はないと納得せざるを得なかった。

ナイジェルはグツと唇を引き結び、一歩下がってカインとルーナに一礼する。

「どうかご無事で帰られますよう」

「ああ。おまえはのんびりとラズゴアの面倒でも見ていてくれ」

カインは笑ってナイジェルの肩を叩くと、ペリアヴェスタに向けて声を張りあげた。

「ここには彼を置いていく」

彼の宣言にペリアヴェスタは一言「承知」と答える。すると次の瞬間、ナイジェルと近くにいたラズゴアが淡い金色の光に包まれ、一瞬にしてその場から消えた。

「ナイジェルさん!」

思わずルーナが叫ぶと、神獣は首を巡らせて神木の方を示す。その横には、状況を把握

できずに困惑の表情を浮かべているナイジェルとラズゴーが立っていた。

「結界の中に送っただけだ。あちらからこちらの様子は見えないようになっていた」

ペリアヴェスタの言葉に、ルーナは彼の提案がナイジェルを遠ざけるためにあえて出されたものだったと気づく。

「さて汝ら、約束を違えることはないな？」

「わかつています」

カインとルーナは同時に答えると、お互いの顔を見合わせてうなずいた。

十

瘴気を浄化すること、そして聖なる泉を復活させること。ペリアヴェスタが出した二つの条件のうち、まずは前者をクリアするため、ルーナは神獣に声をかけた。

「瘴気を封じた場所はどこなんですか？」

「我が案内しよう」

ペリアヴェスタが案内してくれるおかげで、場所を探する必要がなくなり安堵するものの、

ルーナはふと神獣の姿をまじまじと見つめ、困ったように眉尻を下げた。

「わたしたち、彼についていけないかな？」

カインを見上げてルーナが不安を漏らすと、彼は足場の悪い岩の上に立つペリアヴェスタの姿に眉根を寄せた。平らな道ならば問題はない。しかしあのような岩壁を移動するならば、ルーナどころかカインでも無理だ。

(仕方ない、なるべく通れそうな道を選んでもらうしかないね……)

ルーナがそう覚悟を決めた時、彼女の足下にいた小さな獣たちが声をかけてきた。

「私の背に乗ればよいぞ」

「うむ。今回は特別だ。私の背中をアレに貸してやろう」

シリウスがルーナに向けて言うと、レグルスはカインをアレ呼ばわりしつつ居丈高に告げた。その言葉にカインが反論しようとする、二匹の身体が眩しい光に覆われ、一瞬にしてその姿が本来のもの——巨大な狼と獅子に変わった。

(うわあ、やつぱり大きいしいちゃんとかぐちちゃんもいいなあ)

いつものごとく抱きついて堪能したい衝動に駆られたルーナだが、今の状況を思い出して必死に耐える。

「ルーナ、乗れ」

シリウスはそう言つて彼女に背中を向けると、乗りやすいようにと地面に伏せた。それでも本来の姿になつたシリウスの背中に乗るのは、ルーナにとつてなかなかの重労働だ。気合を入れてルーナが彼の首元の被毛に手を伸ばすと、突然ふわりと身体が浮き上がる。「ええっ?」

声をあげ、首だけを後ろに向ければ、そこには得意げな風姫の顔があつた。どうやら風の方でルーナの身体を持ち上げたようだ。

そうして彼女が風姫と共にシリウスの背中に収まつた頃には、すでにカインはレグルスに騎乗していた。そのカインがこちらを向いた瞬間、彼は大きく目を見開く。

「……あの時の精霊?」

呆然とつぶやいたカインに、ルーナは今、彼の目には風姫が見えているのだと気づく。

それと同時に、ルーナが誘拐された豊穰祭の事件でウォーレンの母を吊つた際、風姫がその姿を彼やユアンに見せていたことを思い出した。

『奴ならば、問題なからう?』

そう風姫に言われ、ルーナは「そうだね」とうなづく。そして、風姫の姿が記憶より随

分小さいことに困惑しているらしいカインにクスリと笑つた。

「風姫さんだよ?」

紹介するように風姫を指し示すルーナに、カインは驚きを取めるとふわりと笑みを浮かべ、「やつぱりルーナはすごいですね」などとつぶやいていた。

「では、行くぞ」

ペリアヴェスタが掛け声と共に軽く跳躍し、険しい岩壁を軽々と駆け上つて行く。シリウスとレグルスはそれに遅れることなく、同じように岩場を駆け上がった。

(あうう、ジェットコースター再びだよ……)

内心で悲鳴をあげながら、ルーナはシリウスの背中から落ちないよう、必死に掴まらるのだった。

†

山頂近くまで一気に駆け上つた獣たちは、洞窟らしき横穴の前で立ち止まつた。その大きな入口から奥は真つ暗で、中の様子は垣間見えない。

ペリアヴェスタはついて来いというように一度振り返ると、そのまま洞窟の中に足を踏み入れた。彼の後に続くシリウスとレグルスは、外の明かりが一切届かない闇をもつとせず、確かな足取りで進んで行く。

目を凝らしても何も見えない漆黒の闇の中、ルーナはシリウスに掴まったまま、耳から入る情報だけに集中していた。彼女がこの状況をそれほど恐れずに済んだのは、ひとえに手を握ってくれていた風姫のおかげだった。

洞窟の中を進んでどれほど経つただろう。先頭を歩いていたペリアヴェスタの足音が止み、数秒遅れてシリウスとレグルスも足を止める。

「見ろ」

彼の言葉と同時に、突然視界に飛び込んできた景色。魔法なのか、神獣としての力なのかはわからないが、ペリアヴェスタのおかげでルーナにも薄暗いながら辺りの様子が認識できた。

目の前に広がるのは天然の劇場といった広い空間で、ルーナたちはちやうど二階席にあたるような岩棚に立っていた。

「ここって鍾乳洞……？」

シリウスの背から滑り降りたルーナは、天井を見上げてつぶやくと、続いてペリアヴェスタの横に立って下を覗き込んだ。

洞窟の天井には乳白色や灰色の岩がつららのように突き出しており、崖下には石筍という筍状の岩石が一面にボコボコと生えていた。その石筍の間からは、黒紫の煙がうつつすらと立ち上り、なんとも不気味な様相を呈していた。

「瘴気……」

見ているだけで気持ちが悪くなりそうなその濃い煙は、一定の高さまで来ると消える——どうやらそれ以上は広がらないよう、結界が張られていると思われた。

「なんでこんな風に……」

誰にもなくカインがつぶやくと、ペリアヴェスタは悲しげに瞳を揺らす。

「かつてここには泉があった。その澄んだ水が山の緑を潤し、生き物すべてを育んでいたのだ。しかし突然泉が干上がり瘴気が蔓延すると、木々は枯れ、生き物は山を捨てた。そして我は——」

「泉の精霊の力を借りて、ここに瘴気を封じたというわけか」

ペリアヴェスタが途切れさせた言葉を、シリウスが引き継いだ。

「どういうこと？」

ルーナが首を傾げて尋ねると、レグルスが口を開く。

「力ある精霊は、源たる物質、この場合は泉の水だが、そういったものがなくともしづらくは生き長らえる。その精霊の最後の力を借り、この泉に強力な結界を張ったのだろう」

神獣は無言でうなずくと、痛みを耐えるように目を閉じる。その痛ましい様子に、ルーナはそれ以上深く尋ねることもできず話題を変えた。

「でも、なんでいきなり泉は涸れてしまったのかな？ 雨が降らないとか自然災害があったとかじゃないんでしょう？」

「わからぬ。泉が涸れ始めたのは十年ほど前のことだ。ある日を境に泉の水が見る間に干上がってしまった。以来、どんなに雨が降ろうと泉に水が戻ってくることはなかった」

（十年くらい前っていうとわたしが生まれたあたりだよ。自然の影響でわけでもないみたいだし、一体どうして泉が涸れてしまったんだろう……）

ルーナは泉の謎に思いを馳せるが、今はまず瘴気の浄化が先だと思い直す。彼女は両側に立つシリウスとレグルスを交互に見て尋ねた。

「二人とも、浄化できそう？」

ここで瘴気の浄化ができなければ、神木の実を持ち帰ることは不可能になってしまう。

ルーナの心配を余所に、獣たちはあつさりとうなずくと軽やかに跳躍し、眼下の空間のちょうど中央あたりに降り立った。

「よいか、レグルス」

「うむ。行くぞ、シリウス」

最初に、白銀の巨大な狼が天を仰いで遠吠えする。続いて黄金の獅子が同じように天を仰いで咆哮をあげた。

澄んだ空気がビンと震動し、緩やかに周囲へと広がっていく。獣たちの被毛が逆立ち、それぞれが周囲から光を集めるように、白銀と黄金の光を帯びる。

それはまるで一枚の絵画のように幻想的な光景だった。彼らによって周囲の岩壁が照らし出され、鍾乳石の柱や、おびたらしい数の石筍が白く浮かび上がった。

光を帯びたシリウスは、地面から長短に伸びる石筍を優雅に避け、ゆつくりとした足取りで空間の端へと歩き出す。同じようにして、レグルスもシリウスとは反対の方向に歩き出した。そして彼らは対角線上に対峙すると、もう一度その場で吼えた。

音を追うように光もまた辺りに広がり、白銀と黄金の光の波紋が中央に向けて押し寄せ

ていく。その光に洗われるように石筍の間から不気味に立ち上っていた煙が消えていき、中央でぶつかり合った二色の光は、そこで眩しいほどの輝きを爆発させた。

「浄化、できたのかな……?」

眩しさを目を瞑っていたルーナは、目を開けて眼下を覗き込む。

そこには先ほど同様石筍の並ぶ光景が広がっていたが、ただ一つ違うのは、ゆるゆると立ち上っていた瘴気が綺麗さっぱりと消え去っていることだった。

「瘴気が浄化された……」

ペリアヴェスタは感極まった様子で声を絞り出すと、一気に跳躍して下に降りる。

「風姫さん、わたしも下に降りろして」

ルーナが頼むとすぐさま風姫が風を操り、彼女とカインを降ろす。

一方、シリウスとレグルスは、水滴を払うように一度大きく身を震わせると、ゆつたりとした優雅な歩みでルーナに近づいてきた。

彼女はそれを待ちきれず、獣たちの名を呼びながら走り、そのまま飛びつく。最初にシリウスの白銀の被毛に顔を埋めたルーナは、その柔らかな感触を全身で堪能してから続いてレグルスへと抱きつく。そして彼の鬣に顔を埋めると、満面の笑みを浮かべた。

「すごい、すごいよ、二人とも！」

ルーナの手放しの賞賛に、シリウスはふさふさとしたしつぽを緩く振り、レグルスも長く優美なしつぽをピンと立てて喜びを表す。

「我らにかかれれば容易いことだ」

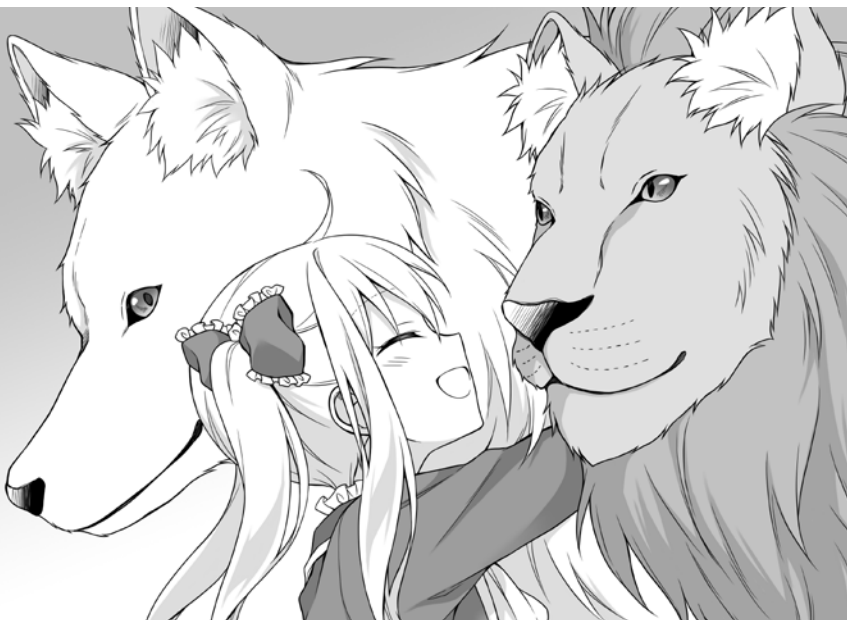
「うむ。この地は日と月の祝福を受けているゆえ、力を開放しやすいな」

シリウスが自慢げに言うのと、レグルスもぐるりと首を巡らせてそれに続く。

「日と月の祝福……」

ルーナの囁みしめるようなつぶやきに、ペリアヴェスタが応えた。

「ロズワルドを改心させたのは、強きソレスと優しきルナリス。彼らの守護がこの神域にはある」



ペリアヴェスタの説明に、ルーナは神殿に祀られていた太陽と月のシンボルと、そしてこの地に伝わる神話を思い出した。

「それゆえ我らも思う存分力を発揮できたというわけだ」

レグルスの言葉にルーナはなるほどとうなずく。いざとなれば力を発揮できるとはいえず、昼は月の力を糧とするシリウスが、夜は太陽の力を糧とするレグルスが、本来の力を幾分削がれるのだ。そんな彼らが存分に力を振るえたのは、ここにある特殊な結界のせいなのだろう。

「それにしても、どうして貴方は封じるだけで瘴気を浄化しなかつたのですか？」

それができぬはずはなさそうなペリアヴェスタに、カインは不思議そうに尋ねた。ペリアヴェスタは金の瞳を一度閉じ、やがて再び開けて語り出す。

「我はロズワルドを見守り、神木を守護するもの。瘴気に穢れた大地のせいで神木は相次いで朽ち果てていき、我の力も削がれた。そして神木を守るために残る力の大半を注いだ我には、瘴気を封じることしかできなかつたのだ」

「そうだったんだ……」

ルーナが神妙にうなずくと神獣は毅然と顔を上げ、浄められた泉の跡地に目を細める。

「だが汝らのおかげでこの地は浄化された。我の力もいずれ戻るであろう」

「よかつた……」

そう微笑むルーナだったが、まだもう一つの課題である泉の復活が果たされていないことを思い出し表情を引き締めた。彼女はカインと獣たちを振り返り口を開く。

「でも、泉を復活させるつてどうすればいいんだろう？」

水を湧かせるためには、そもそもそこに水源があることが大前提だ。けれど水の精霊がないことから考えても、この地に水がないのは明らかだった。精霊は彼らの宿るべき物質——この場合は水——のない地には長く留まっていられないのだから。

ならば水の精霊を連れてくればいいのだが、まったく水がない地に呼べるのは自ら水を喚べるほど力のある精霊のみで、そんな高位の精霊が人間を助けてくれるかどうかはまったくわからない。

さらに万が一泉を湧かせることができたとしても、その地に留まって泉を守護する精霊がいなければ、また泉は涸れてしまうかもしれない。だが泉の守護となれるような高位の精霊は、縄張りや住処というものにとってもこだわるのだ。つまるところ、精霊と契約を結ぶのと同じで、すべては精霊の気持ち次第ということだ。

風姫にそう説明されたルーナは、途方に暮れて頭を抱える。そんな彼女の袖を風姫が引つ張った。

『ルーナよ。そこな水精が何か言いたいようだぞ』

「え？」

なんのこともわからず風姫を見たルーナは、ベルトにぶら下がった袋を指し示されてハツとする。すっかり忘れていたが、そこにはリラの泉からついで来た金魚の水精入りの小瓶が入っていた。

「金魚の精霊さん!」

『うむ。それだ』

ルーナが慌ててポケットから小瓶を取り出して覗くと、赤い金魚は何かを訴えるようにしきりに小瓶の中を泳ぎ回る。そんな水精の声を聞き取ろうと、じつと小瓶を見つめる彼女に、ペリアヴェスタが驚いたように声をあげた。

「それは泉の精ではないか!」

「えと、確かにこの子はリラの泉の精だけど……」

ルーナが答えると、ペリアヴェスタはそれに被せるようにして話し始める。

「リラの……そうであったか。かの泉はこの泉の水を用いてリラが湧かせた、謂わば子のようなもの。リラの泉の精ならば、この泉を住処とするのに否やはなからう。今は力を削がれているようだが、本来は守護となるにふさわしい精霊だ」

「二つの泉には、そんな関係があったんだ。てか金魚さん、実はすごい子なのかな?」

新たな事実にもルーナが驚いていると、風姫は腕を組んでやたらとうなずいていた。

『母なる泉が濁れてしまったせいで、リラの泉の力も削がれていたのだな。ならばあの穢れも納得できるというもの』

「そういえば、本来は泉に浄化作用があるって言ってたよね。じゃあこの金魚さんをここに放つてあげれば……」

『泉は復活するかもしれない。それに水さえ湧けばこの力も戻るだろう』

金魚を指して言う風姫に、ルーナのテンションも上がる。

「あなたをここに還してあげればいい?」

小瓶を翳して金魚に話しかければ、ルーナの脳裏に消え入りそうな「声」が聞こえてきた。

『泉の中央へ……』

ルーナはうなずくと、かつて泉であったと思われる場所の中央へ足を運ぶ。よく見れば

くまなく石筍が立ち並ぶ中、一部に石筍のない、彼女が手を広げたほどのスペースがある。(ここから水が湧いてたのかな?)

そう当たりをつけたルーナは、手に持った小瓶の蓋を外し、ゆつくりと地面に向けて傾けた。

小瓶の水が地面に注がれると、乾いた土の色が濃くなり、そのまま地中に染み込んでいく。だが水はほんの少し地表を潤しただけで、それ以上はなんの変化も見られなかった。

「これじやだめつてこと?」

ルーナがつぶやくと、小瓶から消えた金魚が地表近くに現れ、ふよふよと尾を動かした。

『わたしの力では……だめ……』

微かに聞こえる精霊の声はなんとももの悲しく、彼女の胸を揺さぶった。

「なんとかならないのかな……」

『やはり水のない場所で、水を喚べるような精霊となると、相当高位のものでないと無理かもしれない』

風姫は腕を組んでそう言うのと、すでに乾きつつある地面を睥んだ。

「高位の精霊を呼べたらいいんだけど……」

『おおそうじや! ルーナ、そなたが呼んでみてはどうだ。なんといつてもこの妾を呼び寄せたのだ。高位の精霊の一人や二人、すぐに出てくるであろう』

何故か自慢げに胸を張る風姫とは裏腹に、ルーナは青ざめる。

「わたしにそんな高位の精霊を呼べるわけないよ! 風姫さんだつてたまたまわたしを気に入ってくれたから助けてくれただけなのに」

慌てて首を振るルーナに、風姫と獣たちはやれやれと肩を落とす。風の精霊王を使役している精霊使いにもかかわらず、ルーナ自身は自分のことをまだ見習いと思っっているのだ。

「ルーナ、やつてみたらどうです?」

「うむ。ルーナならば造作ないぞ」

「やつてみるが良い」

風姫のみならず、カインやシリウス、レグルスまでもがプレッシャーをかけてくる。だが彼女は、ただ首を横に振り続ける。

(どうしよう。風姫さんの時つてどうしたんだっけ……)

風姫との契約時、ルーナは魔物に襲われて切羽詰まっていたせいで、自分がどうやって彼女を呼んだのかほとんど覚えていなかった。

決心できないルーナに、風姫は『困ったのお』と笑いながら口を出す。

『そんなに自信がないのなら、アレに助けを求めたらどうだ』

そう風姫に言われたもののルーナは、彼女が指す『アレ』がわからなくて首を傾げる。

『そこにあるであろう。助けを求める術が』

そう言つて風姫が指差したのは、ユアンが持たせてくれた二つ石のスカーフピン。それを見た瞬間、ルーナは「あつ」と声をあげて顔を輝かせる。

（そっか、精霊のことはフレイに聞けばいいんだ！ なんととってもわたしの『師匠』だし！）

ルーナはその勢いのまま「遠話」が繋がるスイッチ——二つ石のうちのひとつである紫水晶に触れる。

魔法具でもあるそれは、触れることによって魔法が発動し、相手に自身の声を届け、また相手の声をこちらに届けるのだ。

「フレイ、聞こえる？」

「ルーナか!？」

数日ぶりに聞くフレイルの声に、ルーナは何が解決したわけでもないのに安心する。

「あのね、今大丈夫かな？」

「大丈夫じゃないと言ったら切るのか」

ぶつきらぼうに返されるものの、ルーナは普段と変わらぬフレイルの態度に思わず頬を緩めた。

「おい、どうした？ 何かあったのか？」

自分から突き放しておきながら、相手が無言になると焦つたように尋ねてくるフレイル。そんな彼の態度にまた小さく微笑み、ルーナはこれまでのことを語り出した。



「——それで、泉を復活させるためには、力の強い精霊を呼ばなければならぬの」
ルーナの話し、「また厄介事を……」と呆れたフレイルは、面倒臭そうに答える。

「おまえなら、高位の精霊であろうと簡単に呼べるだろう」

皆と同じように、いともあつさり告げるフレイルに、ルーナは苛立って噛みついた。

「簡単じゃないよ！ 風姫さんの時はフレイルがいてくれたんだもの」

フレイルは頑なに主張するルーナのため息をつくとき、言い聞かせるようにゆつくりと話しかけた。

「出発する時、おまえに渡したハンカチは持っているか？」

「え……うん。お守りだと思つて身につけてるよ」

素直に答えるルーナに、フレイルは何故か一瞬黙り込む。しかしすぐに軽く咳払いをし、話を再開した。

「それに描かれているのは、精霊を呼び込む呪いとして俺の一族に伝わる紋様だ」

「フレイルの一族？ そういえば精霊を呼ぶ呪歌とかもあつたし、何か謂われがある一族とかなの？」

ルーナが好奇心のままに聞き返すと、彼は突然黙り込み、次に冷たく突き放す。

「それは今関係あることか？」

「ご、ごめんない……」

フレイルの凍りつくような拒絶に、ルーナは息を呑み、ただ謝罪するしかない。そんな彼女の動揺が伝わったのか、彼は魔道具こしにも聞こえるような大きなため息をつくとき、改めてルーナに声をかけた。

「ハンカチを広げて、水の精霊を呼んでみる。おまえの声ならきつと届く」

ぶつきらぼうではあるが普段のトーンに戻ったフレイルに、ルーナはホッと胸を撫で下ろす。そして気合いを入れるように一人うなずいた。

「ありがとうフレイル！ わたし、頑張る」

礼を言う彼女に、フレイルは励ますでもなくそつげなく告げる。

「用が済んだのなら、話は終わりだ。俺は忙しい」

ルーナはそんな彼の物言いにも笑顔のまま、もう一度礼を述べる。すると不意に小さな声が彼女の耳に届いた。

「……いつか、おまえには話すことができると思う」

「フレイル？」

ルーナの呼びかけに答えることなく、遠話は一方的に終わった。しかし彼女の胸はあたたかいものに満たされ、それは最高の励ましとなったのだった。

ルーナは静かに成り行きを見守っていた皆を振り返って告げる。

「皆、わたし、やつてみるね！」

励ますように皆がうなずくと、ルーナは両手にフレイルのハンカチを持つて広げた。

「呼びかけて命じればいいだけだ。」

いつか聞いた彼の言葉に背中を押され、ルーナは目を閉じて願った。

「力ある水の精霊よ。どうかわたしに力を貸して！」

言葉は力となり、紋様として描かれた呪いにも力を与える。そしてそれに引かれる精霊の目印となる。

——刹那、水しぶきの音が聞こえた気がした。

目を開ければ、眼前に一人の美女。

足下近くまで伸びた波打つ髪は、深い藍に始まり、毛先は透明に近い淡い青と、まるで様々な水の色を表しているかのよう。その美貌は、各パーツが完璧な調和をもつて配置されているながら、わずかに垂れた目尻が柔和さを醸し出している。そして双眸は、まるで

アケマリン
藍玉のような透明感のある水色をしていた。

「ああ、水の精霊さんだ……」

呼びかけに応えてくれた高位精霊らしき絶世の美女を前に、ルーナは感動に胸を震わせる。そんな彼女へ精霊はにっこりと微笑んだ。

『わたくしを呼んだのは、貴女ね？』

「は、はい」

優しげな容貌にふさわしい、穏やかな口調で彼女が尋ねると、ルーナは緊張に上擦った声で短く答える。そんな中、唐突に風姫が声をあげた。

『なんとまあ、そなたが来るとはな……いや、やはりと言うべきか？』

呆れと驚きを含んだ声に、ルーナは風姫へ「知り合い？」と視線で問う。それに答えることなく、彼女は二十代半ばほどに見えるその美女をまじまじと見ている。

『契約を結ぶのか、水姫よ』

問いかける風姫に、水姫と呼ばれた精霊は妖艶に微笑んで応える。彼女はルーナに近づく、ゆつたりとした動作でその手を差し出した。

『わたくしを求めるのならば、この手を取って？』



ルーナの頭（あたま）に響（ひび）くひどく優しい声（こゑ）。彼女は（かのじよ）その声（こゑ）に酔（よ）いしれ惑（まど）わされるかのように、精（せい）霊（れい）の手（て）を取（と）っていた。

「わたしに、貴女（あなた）の力（ちから）を貸（か）して下さい」

『もちろんよ、可愛（かわい）らしいご主人様（しゅじんさま）。わたくしの名（な）はユーフォミア。真名（まな）をもつて貴女（あなた）に従（したが）いますよ——契約（けいやく）は成（な）されました。どうかわたくしのは水姫（すいき）と呼（よ）んで下さいませ』

水の精霊（すいせいれい）——水姫（すいき）がそう告（つ）げると、彼女（かのじよ）と繋（つな）いだ手（て）から何（なに）かがルーナに流（なが）れ込んでくる。風姫（ふうき）の時（とき）にも感（かん）じたそれは、ルーナの中（なか）を巡（めぐ）り、水姫（すいき）へと還（かえ）って行く。どこからが自分で、どこからが彼女（かのじよ）なのかわからなくなるような一体感（いつたいかん）の後（あと）、ルーナの目（め）の前（まえ）で水姫（すいき）が淡（あわ）く輝（かがや）いた。

それは精霊（せいれい）との契約（けいやく）が成（な）された証（あかし）。

見（み）つめ合（あ）い、絆（きずな）を確（た）かめ合（あ）うようなルーナと水姫（すいき）に、ぷうつと頬（ほ）を膨（ふ）らませたのは、水（すい）姫（き）と同じ精霊（せいれい）である風姫（ふうき）。

『仕方（しかた）ないこととはいええ、よりよってそなたとは。なんだか妾（めかけ）は面白（おもしろ）くないぞ』

不満（ふまん）げな風姫（ふうき）に続（つづ）き、シリウスとレグルスも不機嫌（ふきげん）そうに水姫（すいき）を一瞥（いちべつ）したかと思うと、

ルーナを見て肩を落とした。

「風に続いて水の、とは……」

「ルーナはまつたく……」

守護者たちの態度の意味がわからず、ルーナがキョトンとしたまましていると、水姫はその頭を愛しげに撫でてクスクスと笑い声をあげた。

『久方ぶりだというのに、風姫ときたらつれないこと。それにしても貴女、随分と可愛らしい姿になっているのね』

『う、うるさい！ 妾のこの姿はな、ルーナが「かわゆい」と言ってくれておるから良いのだ！』

『あらあら。ではわたくしも同じように幼き姿をとりましようかしら』

水姫と風姫のやり取りを眺めていたルーナは、水姫の言葉に思わずニヤついた。

（勝ち気ちゃんタイプとおっとりお嬢様タイプの少女が、仲良くお手々繋いでとか……うん、ありだ。めちやくちや見たいかも！）

その緩んだ表情により、彼女の脳内で練り広げられる妄想は他の皆にもダダ漏れた。彼女の反応に、自称『かわゆい王』の座に危機感を募らせたのか、風姫は慌てて口を開く。

『水姫！ そんなことより早うルーナの願いに応えぬか！』

その言葉にハタと我に返ったルーナは、改めて水姫へ向き直った。

「水姫さん、この泉を蘇らせることができるでしょうか？」

ルーナが期待を込めて尋ねると、水姫は嫣然と笑ってうなずく。

『ええ、おまかせ下さいな』

「よかった……！」

喜びに顔を輝かせるルーナを見て、横で聞いていた風姫が呆れた様子で口を挟んだ。

『ルーナよ、気づいておらんのか？』

「ん？ 何かあるの、風姫さん？」

コトンと首を傾げるルーナに、風姫は肩を竦め、シリウスとレグルスは「はあ」とため息を零す。ますます訳がわからなくなつて困惑する彼女に、諦めたように風姫が告げた。

『そやつは水を統べる、妾と同じ精霊王だ。泉を蘇らせることなど容易きこと』

「ええええ——！」

絶叫するルーナに、シリウスとレグルスはゆつくりと首を左右に振る。カインには、水姫が見えていないものの、風姫の言葉で事情がわかったのか苦笑している。

『水姫よ、そこな奴のために姿を現してやれ。ルーナが後で説明するのは大変であろう?』
水姫はうなずくと自らの姿をカインにも見えるようにし、突然の美女の登場に目を見開く彼に色っぽく流し目をくれた。

『だから遊んでいる場合ではないというに……』

焦れて睨みつける風姫に、水姫はクスリと笑って片目を瞑り、ようやくルーナの願いを叶えるべく動き出す。

『皆様方はさがって下さいませぬ』

水姫はそう言つて自分以外の者たちが上にある横穴へ移動したのを確認し、泉の跡地の中心部に立った。

彼女は優雅な仕草で腰を屈め、両手を地面に伸ばすと、次にゆつくりとその手を天へと持ち上げる。水姫の手が真つ直ぐに頭上へ伸ばされると同時に、それに引つ張られるようにして、乾いた大地から噴水のように水が噴き出した。

「あれは……!」

岩棚の上から水姫の様子を見守っていたルーナは、小さな金魚が水柱に乗って遊ぶように跳ねるのを目にする。そして大量の水を浴びた金魚の精霊がパツと輝いたかと思うと、

次の瞬間、水柱の上には一人の少女が立っていた。

「え、あれって……!」

ふわふわとした薄紅の柔らかな衣装を纏った少女は、十代後半ほどの年齢に見える。肩までの長さの波打つ髪はどこか金魚の尾ひれを彷彿とさせ、耳元にも愛らしいひれがある。彼女は目を丸くしているルーナを見上げると、深々と頭を下げた。

『色々ありがとうございます、姫様。これでリラの泉に住む同胞たちも救われます』

脳裏に響いてくる声で、彼女と金魚の精霊が同一人物だとわかる。

(ええつ、金魚の精霊さんって、これが本来の姿?)

一人で混乱しているルーナにクスクス笑った水精は、身を屈めて水に飛び込んだ。するとパシヤリと水面から赤いものが跳ね上がる。よく見ればそれは丸々と太った鯉ほどの大きさの金魚だ。

(ちっちゃい金魚さんが、でっかい金魚さんに……でも本来の姿はふわふわ美少女)

混乱のあまり呪文のように心の中でつぶやくルーナの頭の中では、それぞれの姿がぐるぐる回っている。その間にも水かさはどんどん増していき、乳白色の鍾乳石の柱や石筍は透明な水の底にその姿を浮かび上がらせる。それはとても神秘的な光景だった。

いつしかルーナたちの足下近くまで届くほど、豊かな水を湛えた泉。
「泉だ……」

「ああ。すごいですね……」

未だ信じられない思いで呆然とつぶやくルーナに、カインも感極まったようにうなづく。
「見事だ人の子よ」

沈黙のまま佇んでいたペリアヴェスタは、金の瞳から一粒の涙を落とした。

「ペリアヴェスタさん」

ルーナがその名を呼ぶと、ペリアヴェスタは遠い目をして彼女に告げた。

「我は神木の守護——そしてロズワルドの子」

「それって……」

「我は死した後、母の化身であるこの山が神木を育むのを傍で見守っていた——人の子よ、母を救い、泉を蘇らせてくれたことに感謝する」

ルーナはふるふるとう首を横に振ると、おずおずとペリアヴェスタに近づき、その首にそつと腕を巻きつける。そして優しく彼に囁いた。

「今までよく一人で頑張ったね」

彼女のぬくもりを感じ、ペリアヴェスタは金の瞳を揺らす。そしてその様子を優しい眼差しで見つめる者たちに目を向けつぶやいた。

「汝に惹きつけられる者の気持ちだが、我にも少し理解できた。汝はなんともあたたかい……」

彼はルーナに「手を出せ」と告げた。不思議に思った彼女が彼から少し離れ、両手を前に差し出すと、ペリアヴェスタは軽く頭を振る。

次の瞬間、彼女の手のひらの上に桃に似た金色の果実が載っていた。

「これ……」

「神木の実だ。持つて帰るが良い」

ルーナはそつと手のひらの上の果実を撫でると、ペリアヴェスタに向けて微笑んだ。

「ペリアヴェスタさん、ありがとうございませす」

「汝の正当なる報酬だ、礼には及ばぬ。さあ、アンプロシアの神木の実を泉の水に浸すが良い。この実はそ



のまま神域を出ると朽ち果ててしまう。だが、泉の祝福を浴びたものは守られる」

「はい！」
ルーナは元氣良く返事をする、その場に膝をつき水面を覗き込む。そうして手の中の果実を慎重に泉の水に浸した。

「あ、色が……」
神木の実は、水に触れるとその色を金から落ち着きのある黄色がかった白に変えた。どうやら水に浸したことで、何か作用が働いたらしい。

「その実は、人にとつては至高の妙薬となる」

「はい……」
ルーナは深くうなずき、手のひらの実をハンカチで包んでそつとポケットにしまい込んだ。

「では汝を神木のもとに送つてやろう」
ペリアヴェスタは今までの近寄りがない雰囲気と和らげ上機嫌な声でそう言う、ゆつくりと大きく首を巡らせる。すると精霊以外の実体を持つもの——つまりルーナとカイン、シリウスとレグルス——の身体が淡い金色の光に包まれた。

(転移?)

ルーナがそう思った時にはすでに景色は一変し、彼女たちは一本の大木の下に立っていた。

「これが神木……」

近くで見るとそれは、緑の葉に金の煌めきを宿し、先ほどペリアヴェスタにもらい受けたものと同じ果実を枝に実らせている。

「カイン様！ ルーナ様！ ご無事で……」

ぼんやり神木を眺める彼女たちに、後ろからナイジェルが声をかける。慌ててシリウスたちを見たルーナは、彼らが本来の姿ではなく、いつもの子犬と子猫の姿になっているのにホッと息をついた。

近づいてきたナイジェルは、よほど嬉しかったのか、カインの前に立つて感極まったように捲し立てた。

「神木の実は手に入ったのですね！ 本当によかった」

「ああ、ルーナが尽力してくれたおかげだ」

カインが言う、ナイジェルはルーナに深々と頭を下げる。